

プラスチックのバケツは民具か？ ——作られたものをめぐる哲学

* 丸 田 健

要 旨

本稿は「現在ポリバケツは民具である」という民具学の或る学説を取り上げる。なぜそのような説が主張されねばならなかったのか。まず古典的な民具概念の成立事情をたどる（第二章）。古典的概念に対する反発としてのポリバケツ民具論を概観し、その主張の構造を検討する（第三章）。桶の構成要件の複数性を確認するため、桶のあらましを描写する（第四章）。ポリバケツ民具論は、物の構成要件の一つのみを不十分に満たすものであり、さらにその他のものを等閑視するものとして、批判される（第五章）。最後にカテゴリーについての現代的考えを民具に適応することを提案する。

【キーワード】ポリバケツ民具論、結物、「アイデアとパターン」、「原因」の複数性、伝承性

一 はじめに

「手桶」という地味な道具は、小説の生活描写においても、それと

なく空気のように登場する。

「……」下宿生活にもどるくらいなら、はじめから家を持たないほうがよからう。第一鍋、釜、手桶などという世帯道具の始末はどうつけたらう。「……」（夏目漱石『三四郎』¹）。

夕方には庭に水を打った。二人共跣足はだしになって、手桶を一杯ずつ持って、無分別に其所等そこいらを濡らして歩いた（夏目漱石『それから』）。

春の日はきのおのごとく暮れて、折々の風に誘われる花吹雪が台所の腰障子の破れから飛び込んで手桶の中に浮ぶ影が、薄暗き勝手用のランプの光りに白く見える（夏目漱石『吾輩は猫である』）。

目立たないとは言え、引用からも窺えるように、生活用水を汲

む・溜める・運ぶための必需品として、かつて手桶という木製容器が、台所などの生活空間に置かれていた。しかし明治の途中から、近代工業的な素材・製法で作られるトタン（亜鉛メッキ鋼板）製のバケツが使われ始め、さらに昭和中期以降にはプラスチック製の「ポリバケツ」⁽²⁾が回った結果、現在、水を入れたり運んだりするた

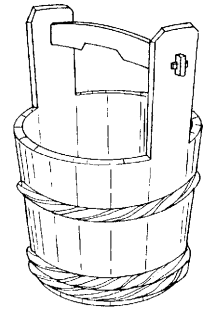


図1 手桶
『日本大百科全書』
小学館より

めの最もありふれた生活道具はポリバケツとなった。本稿では、ポリバケツについての或る考えを取り上げるが、それは民俗学・民具学の重鎮 岩井宏實（一九三二—二〇一六）による主張である。手桶は「民具」に分類される生活道具の一つだが、人が現代生活で日常使うのはポリバケツであることから、彼はいまや「ポリバケツ」も民具である（岩井 二〇一一、六一頁、傍点追加）と主張する。この考えを我々は、「ポリバケツ民具論」と名付けようと思う。⁽³⁾⁽⁴⁾

検討したい問題は、ポリバケツを民具に加えることの是非である。例えばオムレツやプリンは今日、日本人の生活に定着した料理であるにせよ、「日本で食べられている。だから和食である」と結論するならば、それはぜひぶん短絡的な思考だろう。同様に、ポリバケツ民具論が「庶民が使う。だから民具である」と主張するものなら、それにも類似の——あるいはそれ以上の——飛躍があるように思う。しかしそれは、どんな飛躍なのだろうか。

多くの概念には、しばしば曖昧さが伴う。そして曖昧な概念であれば、解釈の自由も生じるだろう。だが手桶の仲間にポリバケツを加える自由さは、民具概念を柔軟に広げ、現代へと橋渡しする利があるように見て、結局は逆効果に終わるのでないか。それはかえって概念の特色を薄め、プラスチック品でないからこそ發揮しうるその意義を、結果的に失わせるのでないか。本稿では、ポリバケツ民具論の筋道を明確に取り出すとともに、手桶全体の複合的連続性の観点からポリバケツ民具論への応答を行おうと思う。

二 民具観の展開

二・一 標準的な定義

ポリバケツ民具論という主張がなぜ、民具研究の第一人者から提出されることになったのか。最初にその経緯を辿りたい。

先人の生活を理解することを期待して、日本の庶民が必要とした日常道具を集め、それらを土台に民具研究の先鞭をつけたのは、渋沢敬三（一八九六—一九六三）と、彼が主宰する研究組織／施設「アチックミューゼウム」の仲間たちだった。自分たちがどんな道具を選んで蒐集すべきなのか、また蒐集したものを何と呼ぶかについては、昭和初期の道具蒐集の開始以来、変遷があった（宮本 一九七六、九—一頁、宮本「一九七九」一九八七、六五頁以下、近藤 二〇〇二、一五頁以下など）。集めたものの呼び名として、「民俗品」「蒐集物」な

どが使われたこともあったが、やがて「民具」という言葉が定着して今に至る。しかし「民具」と呼ばれることになった物の具体的内容・範囲をどう定めるかについては、より根本的な模索があった。蒐集初期の様子を回想した次の記述を読むと、蒐集物——ここでは「民俗品」と呼ばれている——は最初、かなり限定的だったことが分かる。

渋沢先生がこれを集めはじめた頃にはその範囲はきわめて狭いものであった。漠然とした概念があつて、手作り自体が基本であり、職人の作ったものはできるだけ除外している。未開社会にあつては、職業分解はほとんど見られず、その社会に必要なものはそこに住む人たちによって自給されていた。そういうものを民俗品というならば、当然、鍛冶屋、大工、石工、瓦師、焼物師などの、「専門職が」作ったものは民俗品とは言えないことになって来る。したがつてその初め、渋沢先生と先生の主催するアチックミューゼウム同人によって集められたものを見ると、鉄製品、細工物、石造物、陶器類などほとんどなかった（宮本「一九七九」一九八七、四六一―四七頁、傍点追加）。

最初は、自給自足的な素朴な道具を念頭に、狭い範囲に関心を絞つていたのだった。しかしこの引用箇所にあるように、もし職人的な特殊技術なしに自作できる簡素なもの——藁の草履や竹の漁具など——に限定し、それによって例えば鍛冶屋や鋳物師が作るものを除外し、結

果、蒐集物が包丁や鍋・釜のような生活必需品さえ含まなくなるなら、蒐集物を通して庶民生活を理解するという目的が、達成困難になることは明らかだ。

民具とは何か、またそれは具体的に何を含むかの問題は、その後、『民具蒐集調査要目』という小冊子が作製されたことで、足掛かりができた。この小冊子は、民具を用途ごとのグループに分け、それぞれに入る道具をリスト化した民具蒐集・研究の手引である。その前書きに、次のような民具の簡潔な説明がある。

「民具とは」我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具「である」（アチックミューゼウム編 一九三六、前書き一頁）。

この規定は、以後、民具研究でたびたび言及され、民具の標準的定義の役割を担った。ここにある「同胞」という言葉が、この国に住む庶民全般を指すなら、そこには職人も含まれてよい。そして同胞としての職人が作る、庶民のための生活道具なら、それは民具に加わりうることになる。実際、要目にリストアップされた数百種の民具には、鍋、釜、包丁をはじめ、専門職ないし半専門職が作る生活道具が多く含まれることになった。ここにおいて、民具の内容は、蒐集当初より範囲がずっと広がったことが分かる。

二・二 宮本常一によるさらなる明確化の試み

『民具蒐集調査要目』は民具研究の重要な一里塚的成果だが、改善の余地が残ることも、前書きに記されている。『要目』に課題が残るとすれば、例えばどんな問題がありうるだろうか。二つの「線引き問題」が、指摘できるだろう。(1) まず、要目のリストには(専門技術を持つ)鍛冶職人が作る鉄製品は加わったが、例えば(同じく専門技術を備えた)焼物師が作る「茶碗、皿、徳利のような品目」は民具リストに現れない。⁽⁶⁾この種の不統一は、果たしてそのままではよいのだろうか。これはつまり、古くからあった日本の生活道具のうち、どの範囲を民具とするかという問題だ。(2) もう一つの問題は、近代化以降、新しく作られるようになった道具のうち、どの範囲を民具とするかというものだ。例えば織物を考えたとき、明治以降、紡績機械で紡いだ糸、化学染料を使った染め、機械織機で織った布、などが登場した。そういった工業素材を用いた道具は増加の一途をたどるが、それらは民具に入るのだろうか。

リュック姿で日本各地を歩き、庶民生活の膨大な記録を残した民俗学者 宮本常一(一九〇七—一九八二)は、アチックミュージアムの代表的メンバーだったが、民具研究には特に渋沢の死後、力を注いだ。宮本は民具について、生前から聞き及んでいた渋沢の考えをできるだけ反映させながら、さらに概念をはっきりさせる必要があると考えた(宮本「一九七九」一九八七、七四頁)。以下に書き起こすのは、彼がその民具研究をまとめた晩年の著書『民具学の提唱』で示された

民具の要件である(宮本「一九七九」一九八七、七六頁⁽⁷⁾)。

- ① 民具は有形民俗資料の一部である。
- ② 民具は人間の手によって、あるいは道具を用いて作られたもので、動力機械によって作られたものではない。
- ③ 民具は民衆が、その生産や生活に必要なものとして作り出したもので、使用者は民衆に限られる。専門職人の高い技術によって作られたものはこれまで普通、工芸品、美術品などといわれ、多くは貴族や支配階級の人びとによって用いられた。これは民具と区別すべきである。
- ④ 民具はその制作に多くの手続きをとらない。専門の職人が作るというよりも、素人または農業、林業、漁業のかたわら制作しているものである。
- ⑤ 民具は人間の手で動かせるものである。
- ⑥ 民具の素材になるものは草木、動物、石、金属、土などで原則として化学製品は含まない。
- ⑦ 複合加工を含む場合は仕あげをするものが、素人または半玄人であるもの。

各項目に対し、簡単に解釈・コメントを加えておこう。

【①について】「民俗資料」とは、庶民の生活文化の歴史を表すものを指す言葉で、道具のように物質的なものが「有形民俗資料」と呼ばれる^⑧。①は民具をその種の、過去との連絡、つまり伝承性があるものとして特徴づける項目である。

【②について】これは民具を、人間の身体作業が投入されてきたものとして特徴づける項目である。動力機械の使用については後ほど、⑦の箇所でも補足がある。

【③・④について】これらは多少、解釈を要する。先に④を読むことにすると、それは一見「専門の職人が作るものは、民具でない」と述べるかのようだ。だが、これは一体どういうことだろう。というのも、もしこの項目が本場に専門職人を排除するものなら、それは民具観を、『民具蒐集調査要目』以前の不都合に狭いものへと逆戻りさせることになるからだ。

だがここで③に戻り、それを慎重に読むなら、専門職人が作る道具を一律に除外することは宮本の真意でなからうと解釈する道が開ける。というのも、まず③が述べるのは、民具は、民衆の間でその普段の生活のために作られたものだ、ということである。そして③が民具と異なるものとして区別を要請するのは、巧緻な技術で作られる、上流階層のための美術品・工芸品である。つまり③が述べている「民具 vs 非民具」の違いの眼目は、用途の違いに帰着する。

要するに、専門職人は、美術工芸品ばかりを作る者とは限らない。宮本自身が、より以前に或る所で、「専門の職人のつくったものの中にも、民具がある（宮本 一九六九、六頁、傍点追加）」と述べており、職人の製作物にも種類があることを指摘している。ところが宮本は場面によって、「専門の職人」という言葉を、技術の粋を凝らした美術品を専門に作る人を仄めかすかのように使うこともある。このあたりに、宮本の主張の仕方の紛らわしさ、不安定さがあるように思う。以上を踏まえて我々が再び確認すべきは、専門職人には、美術・工芸品制作とは異なる手法・目的で、民衆の生活道具を作る人がいるということだ。そうだとすれば、専門職人の作を、自動的に民具から排除する理由はなさそうである。

④は次のように、言葉の不足を補って理解し直すことができよう。すなわち

④ 民具はその制作に「美術品ほどの」多くの手続きをとらない。「美術品制作のみが」専門の職人が作るというよりも、素人または「半女人さらには専門職人が」「日用道具に相応しい簡素な手法で」制作しているものである。

全体としては、製作者が専門職人か素人かよりは、むしろ——美術工芸品のような技巧的作品でない——庶民の実用品であることが重要

なのだ。それゆえ③・④は、相対的に簡素な技術で作られる、実用性を重んじた庶民の生活道具として民具は特徴づけられる、という趣旨で読むべきだろう。

【⑤について】これは民具を、「手頃さ」によって特徴づける項目である。つまりそれは、「石垣とか井戸とか住居とか」の大きな固定物は、道具でなくむしろ施設に分類することで、それらを民具から区別するものになっている。(ただし⑤に違和感がないわけではない。例えば、「施設も、広義の道具と言えまいか」という反論が予測できよう。)⁹⁾

【⑥について】これは、自然素材から作るものとして、民具を特徴づける項目である。したがって例えば石油そのものは天然資源だが、そこから工業的に合成されたプラスチックは化学素材(非自然素材)に分類されるものであり、民具の素材ではないことになる。

【⑦について】これは、これまでのもの(①から⑥)とはかなり性格を異にする項目である。

⑦の内容を見ていく前に、言葉の整理・確認が必要だ。まず「素人か半玄人」の部分は、先の③・④についての我々の検討を踏まえるなら、庶民の生活道具を作る専門職人も加えて解釈すべきと思われる。

次に「複合加工」——およびその対語「一次加工」——という語について説明が要るだろう。その意味はおよそ次のようなものと、宮

本の文章から汲み取ることできる。つまり、一人の人が素材を準備し、そこから比較的単純な作業によってものを作ることが「一次加工」なのに対し、一次加工の産物に別の人が新たに手を加えたり、それらの素材を組み合わせたたりして、より手の込んだものを作ることが「複合加工」である¹⁰⁾と。

以上を踏まえて言うと、⑦は、複合加工が混じる、より複雑な道具をどう扱うかの項目である。手が込んだものは美術工芸品になりがちだが、⑦の一つの意味は、手が込んだものでも、それが(素人や半玄人が、また、美術工芸品を作るのでない専門職人が、仕上げるもので)庶民の生活道具になるなら、それは民具である、ということだ。¹¹⁾

だが⑦にはもう一つ、本稿にとってより重要な意味がある。明治以降の近代化に伴い、日本の道具製作にも工業素材や機械工程が混じるようになっていく。この事実から生まれる疑問がある。つまり、たとえば工場で機械紡績された糸を調達し、それを使って織られた反物は民具なのか。その反物は、②の要請、「民具は手仕事でなければならぬ」を満たさないのではないか。また化学染料で染めた糸を調達し、それを使って織られた反物は民具なのか。それは⑥の要請、「民具は天然素材でなければならぬ」を満たさないのではないか。これらの疑問に対し⑦は、次のように答えることを認めるものだ。

化学染料をつかい、紡績糸を使っても、それを高機などで手織りにしたものは一応民具と見てよいのではないか「……」(宮本

「一九七九」一九八七、七六頁。

機械工程や工業素材がまじっても、(複数の素材を用い、工程を重ねて作る複合加工の品である) 反物は、それが最後に手織り機で人が仕上げた実用品ならば、民具扱いで一応よくないかということである。⁽¹²⁾

*

指摘しうる個別の疑問点には今は係わらないことにして、宮本の民具規定は次のように整理できよう。つまり民具とは、①伝承性があり、②手仕事によるもので、③・④美術・工芸的な技巧の作というより、一般民衆の暮らしで使うもので、⑤手で動かせるサイズのもので、⑥身近な自然素材によるものである。ただし⑦工業的な素材・製法が混じるものでも、仕上げをするのが(庶民の生活道具づくりに携わる)人間であれば、民具に数えてよい。

*

この民具観に照らせば、現代社会にある諸々の生活道具について、民具か否かの判別がかなり容易にできる。一例として取り上げられるのが、かつての手桶の役割を、現在担っているバケツである。バケツは、トタン製が中心の時期を経て、現在はほとんどがプラスチック製になったが、宮本は次のように結論している。

手桶は民具であるが、バケツは民具ではなくなる(日本常民文化研究所 一九六九、六頁、傍点追加)。

バケツのようなものは機械量産できるもので民具とは言い難い(宮本 一九八七、七六頁、傍点追加)。

バケツは民具ではない。なぜならそれらは工業素材の機械量産品であり、仕上げも手仕事でないもので、規定の②⑥に、かつ⑦にも反するからである。

三 ポリバケツ民具論

三・一 概要——「民具は古いものか」という疑問

ポリバケツ民具論は、ポリバケツについての宮本の結論——そして根底的には、その結論を生む彼の民具観——への反論である。岩井は宮本の民具観を「厳しい」ものだとして批判的に考えているようだが、その指摘は果たして妥当だろうか。というのも、宮本はアチックミュージアム初期の民具観に固執したのではない。我々の理解では、宮本自身は、「専門の職人のつくったものの中にも民具がある」とも考えており、職人の作全般でなく、専ら美術工芸的な作を除外したのだ。また宮本は、手仕事、自然素材によるものを民具の中心に考えつつも、仕上げが人の手によるなら、近代工業的要素の混入も一応受け入れるようであった(その当否には今は触れない)。岩井も、宮本が民具の「厳しい定義をいくぶん幅を広げて考え(岩井 二〇一一、四三頁)」ようにしたことを認める。だがその一方で岩井は、研究者た

ちの民具観は依然、「機械をもって作られたものを排除し、手作りによるものに限定され、素人かせいぜい半玄人のつくったもの」(岩井二〇一一、五六頁、一七九頁)とする傾向が強いままだったと捉え、そこに宮本の影響を見ている。そしてそのような民具観は、「……」民具は古いもの、現代の技術革新の時代とは相容れない前時代のものという意識・感覚」を醸成してきたのだと、岩井は指摘する(岩井二〇一一、五六―五七頁、一七九頁)。

岩井自身は民具をどう考えるのだろうか。彼は、民具は人間の「生活の必要から」生まれ、「機能性と実用性を本旨として」作られてきたものだから、その本質は途絶することなく、未来へとつながるはず(岩井二〇一一、五七頁、一七九―一八〇頁)と捉え、「民具は古いもの」という民具観からの脱却を試みる。岩井がとる方向は、民具の古典的定義——「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」——を正しいとしつつ、それを宮本と同じには展開しないものだ。古典的定義の文言には、素材や製法への直接の言及はない。そこにあるのは、日本人が日常生活の必要のために作ってきたものという実用性への言及である。それゆえ岩井は、民具概念を次のように解釈するのだ。

「……」材質が何であるか、また手作りであるか否かは、資源材料、生産構造、流通機構、社会形態の差異からくることであつて、民具にとつて本質的なものではないと、割り切つて理解する

必要がある(岩井二〇一一、四八頁(傍点追加)、六一頁、一九九頁)。

生活の必要性を満たす実用性が民具の本旨であり、素材・製法は本質でない。プラスチック製でも、機械製でも構わない。そうやって彼は、民具は前時代的な古いものという「先人見」を払拭しようとした。だから彼は言う——現代の人びとの生活の中に生き、使いこなされているポリバケツも民具だ、と。

三・二 その詳細——「アイデアとパターン」の伝承性

岩井の考えには、さらに立ち入つて検討すべき内容がある。民具の本旨を機能性・実用性に定めつつ、岩井は民具の別の側面も重視する。このことを確認するため、民具成立の四段階として岩井が掲げるステップを少し整理して示すことにする(岩井二〇一一、四七頁。参考、五四頁、六三頁)。

- ① まず生活の必要から、ある道具が創作される。
- ② その道具が、共同体のメンバーから共通の理解を得る。
- ③ その道具のアイデアとパターンが定型化され伝統の型となる。
- ④ それが個々の作り手・使い手を通じ、伝承される。

この四段階の中身を見ていこう。岩井は、民具に特に重要なのは、

「共通の理解」だと言う（岩井 二〇一一、四七頁、六一頁）。民具はその性格上、社会のメンバー一般に一定の理解が行き渡っている。そしてその理解の内容は、メンバーたちが「製品の効能を理解しているというだけでなく、「……」その意匠、構造を理解して（岩井 二〇一一、四七頁、六一頁）」いることだとされる。つまり共通理解には、

(1) 効能と (2) 意匠（デザイン）、構造の——二つの、しかしおそらく互いにつながりがある事柄の——理解があるとされる。

これはどういうことだろうか。岩井は「効能」、「意匠・構造」という語を特に説明なしに使っているが、おそらく、(1)「効能」は民具に求められる機能、あるいはそこに流れる発想を表し、また(2)「意匠・構造」は、(1)の実現に必要な) 民具の形・型を表すものと、理解できよう。それらを岩井は、それぞれ「アイデア」「パターン」と言うこともあり、むしろこの後者の用語を好んで使う。そして彼は、民具の「効能と意匠・構造」あるいは「アイデアとパターン」こそが、理解が共時的に共有され、さらに過去、現在、未来へと伝承されるもので、持続性があるものと主張する。つまり岩井自身の考えでは、「民具はあくまでも伝承文化である」が（岩井 一九九四、三〇八頁）、彼はその伝承性を、「アイデアとパターン」に絞って民具を捉えるのである。

次の文章を見ておこう。

民具は実用性と機能性とを本旨とするものであるため、そのア

アイデアとパターンは伝承されながら、物そのものとしては技術の向上によって実用性を失「い」、消滅することもある。「……」しかし「……」伝統的なアイデアとパターンは洗練され再生産され、伝承され、次の物の中に生きていく（岩井 二〇一一、四五—四六頁）。

述べられているのは、民具Aが時代の変化を受けて減んでも、Aに備わるアイデアとパターンが次の道具Bに伝承され、そこに生かされることで、Bが新しい民具となる——ということだ。

そういった新しい民具の例として岩井が取り上げるものに、プラスチック製の弁当箱がある。このプラスチック容器に先行する民具は、コリヤナギの細枝を編んで作る伝統的な弁当箱である。食べ物が入ると濡れ、しかも保存性のよさという効能をもつのがよい弁当箱だと思えば、その発想（アイデア）は、コリヤナギ製の弁当箱では、胴と蓋の両方に深さがあり、編み物細工がもつ通気性のよさを備えた構造（パターン）に反映されている。以上を踏まえ、コリヤナギの弁当箱にあるそれらのアイデアとパターンを伝承するものとして、岩井はプラスチック製のメッシュ入り弁当箱を紹介するのである。つまりプラスチック製弁当箱は、「胴と蓋が同じ深さで二食分入れることができ、柳行李のように「編み状の」透き間をつくっていい、「……」夏場の腐敗を避けることができ」るものだ、と（岩井 二〇一一、五八頁）。コリヤナギ製弁当箱とプラスチック製

弁当行李には、同じアイデアとパターンが一貫して流れている。それゆえ岩井によれば、プラスチックの弁当行李も民具だ、ということになる。

プラスチックのバケツも同様である。彼は言う。

「手桶が」さらに機械工業製品化されてブリキバケツとなり、プラスチック製のものが出現してきて、それが今日重宝されているのであるが、そこに一貫して流れているアイデアとパターンは同じである。そして、それを使うものが抵抗感を持たず、人々の生活の中に生き、使いこなされている。ならばポリバケツも民具である。(岩井 二〇一一、六〇—六一頁、傍点追加。参考、四五頁、一九八頁)。

ではここで、手桶とポリバケツに一貫するアイデアとパターンとは何か。二つを見比べ、共通点が見つかるなら、それは、(1) 水を漏らさず、運搬も容易であるべきというアイデア、およびそれを実現する(2) 開口型で、或る程度の深さがあり、浸透性・孔・透き間がなく、サイズや重さが手頃な容器で、下げて運ぶための持ち手があるという形状のパターン、というものだろう。生活の必要を満たす実用性を本旨とする民具に見つかるこれらの「アイデアとパターン」が伝承されることで新しい道具——この場合、プラスチックのバケツ——も民具とみなされるのである。岩井の考えでは、重要なのはその「アイ

デアとパターン」であり、他の事柄、例えば「材質が何であるか、また手作りであるか否かは、「……」民具にとって本質的なものでない」とされるのである。

三・三 ある疑問

ところでポリバケツ民具論には、さらなる主張が加わる。稿を進める前にここでその内容を短く確認し、疑問点を指摘しておきたい。

意匠や構造について社会に共通理解があることは、民具が単純な道具であることを意味する、と岩井は考える。そしてそのことから彼は、材料や製作道具や設備さえあれば、誰もが自作できるのが民具なのだと言う。

「共通の理解とは」製品の効能を理解していると言うだけでなく、創作者と同じ程度に使用者がその意匠、構造を理解していなければならぬ。「……」。つまり「民具とは」適当な材料と製作道具と設備さえ与えられれば、一般の人間がそれと同じ程度のものを製作できるものである(岩井 二〇一一、四七頁)。

逆に「特別高度な知識、特殊な技術を要求するものは「民具」の範疇に入らない(岩井 二〇一一、四七頁)」と彼は言う。その代表例は、岩井によれば、現代の電子・電気機器である。それらの電氣的仕組み・回路について一般人は共通理解を持たず、電気製品は一般人には

「ブラックボックス」だからである。典型はコンピュータだが、他の家電製品なども同じだという。岩井は民具を、隠れた内部を持つ電気機械類とは違い、人間の身体だけを動力に使用する単純なものだとする。だから今日多くの人に使われる点では同じでも、一方のポリバケツは民具だが、他方のパソコン（そしてその他の電気製品）は民具でないことになる。

この考えへの疑問を二つ、書き出しておこう。

第一の疑問はこうである。岩井は、民具は単純な道具だから、一般人も作れるものとした。しかし桶作りの素材や道具を手にして、私は手桶を作れるだろうか。仮にそれらしき形ができて、恐らくそれは漏れる桶——桶とは言えない桶——に終わるだろう。また素材、道具、設備があれば、私は薪窯の炎を操って、焼物を焼き上げられるだろうか。あるいは鍛冶仕事で、鉄の温度を目で見極めながら、鉄を接合したり、形を叩き出したりできるだろうか。岩井は、従来の民具観には専門職人による製作物を排除する傾向があったとして、その狭さを批判した。しかし仮に民具を、素人が自作できるものに限れば、岩井自身が、専門職人による生活道具を排除することになりそうだ。

第二の疑問はこうである。岩井は「特別高度な知識、特殊な技術を要求するものは「民具」の範疇に入らない」とするのだった。伝統的民具づくりにも専門的知識・技能がありうることは脇に置き、今はポリバケツという工業製品を考えよう。ポリバケツの製造工程というのはおそらく、非専門家にはその機械構造がブラックボックスである

「射出成型機」を操作して、溶かしたポリエチレン樹脂をバケツの金型に射出し、冷やして固化した後に取り出す、といったものだろう。素材を射出するシリンダーの温度、金型の温度、射出の圧力など、工場で調整が必要のようだ。適切に調節するには、専門的知識、技術経験が要るだろう。しかしだとすると（1）「ポリバケツは（一般人も作れる）民具である」という主張と、（2）「特殊技術・知識を要するもの（つまりポリバケツ）は民具でない」という主張が矛盾するが、これについてどう考えればよいのか。

この疑問に対し岩井は、「製造過程の複雑なメカニズム、たとえばポリバケツを製作するための機械に関する理解といったものは必要でない（岩井 二〇一一、四七頁、六一頁、一九九頁）」と書くだけで、それ以上の説明を与えてくれない。「必要でない」とは、どういう意味だろう。岩井は、あるときは民具に特殊技術・知識は不要であることを要請し、あるときはそれが実際必要なことを不問にする。このような齟齬は、読む側を困惑させる。

四 桶・樽のあらまし

だがポリバケツ民具論には、より根本的と思われる問題がある。その問題とは、岩井が民具を、生活の必要性から生まれ、かつ伝承性を備えた道具と考えるとき、なぜ彼は伝承性を、「アイデアとパターン」だけに求め、それ以外の事柄を顧みないのか、というものである。

この問題を考えるため、手桶とは何かをその基本に戻って捉え直す作業をしたい。そして手桶は桶に属する道具であるから、手桶を知るには、桶とは何かを知らねばなるまい。

四・一 桶の基本——その発想や形態など

桶とは何だろう。それは細長い板——それは「側板」「側」「樽」などと呼ばれる——を何枚も並べて筒型にし、丈夫な輪——箍——をかけ、それをきつく打ち込んで結束し、最後に底を嵌めたものである。桶は板を箍で結って作るので、結物・箍物と呼ばれる。

桶は、ものを入れる深さを持ち、ふつう上に軽く開いた円筒形をしている（箍を喰い込ませるには、上下どちらかへ傾斜が胴部に必要だ）。他に、底面にもものを広げることができる、広くて浅い「半切り／半桶」タイプもある。また上から見た形が楕円のものもあれば、一箇所が注ぎ口になっている水滴型の「狐桶」もある。側板の一本を上へ伸ばして持ち手としたものは、「片手桶」である。そして向き合う側板を二本上に伸ばし、二本の間に横木を渡して持ち手にしたものに、「手桶」がある。側板を下に伸ばし、脚にした桶もある。桶には、取り外し可能な蓋がつくこともある。桶の仲間には「樽」もあるが、これは（取り外し式でなく）固定蓋で塞いだ密閉容器で、酒などの液体の保管・輸送に使われる。

形の多様さを例示したが、桶のサイズも大小様々で、片手に乗るものから、中に人が何人も入れる「大桶」——標準的なものでも直径・

高さがそれぞれ約二メートル、容量が三〇石（＝五四〇〇リットル）（一石＝十斗＝百升）というもの——までが作られた。¹³⁾

四・二 桶の素材——木工文化の一部であること

我々の祖先たちは、風土の中に豊富にあった樹木を使い、多くの道具を作ってきた。木の加工技術には、結物以外に、①木の塊の内外を刃物で削って作る刳物、②木を割って作った薄長板（古くは剥いだ樹皮）を、筒状に曲げて綴じ合わせ、底を嵌めた曲物、③粗く整えた木塊を轆轤で回転させ、刃物で内外を削って作る挽物、④板を組み合わせて作る四角い指物（板物、組物）といったものがある。

古い木器は、湿地に浸かって腐敗を免れたものが、稀に出土する。発掘された縄文・弥生時代の木器には、刳物が多い。弥生時代になると、曲物、挽物、また素朴な指物の報告例も見え始める。古墳時代には曲物の出土品が増え、曲物はさらに奈良時代以降、柄杓や食具など、多くの用途で生活に普及していった。挽物も、奈良・平安時代にかけて発達し、使用が広がっていく。奈良時代には高度な指物技術も日本へ入っている。一つの技術が他の技術に対して一概に優れているわけではなく、製法に適した製作物があり、また製法に適した樹種がある。

我々のテーマである結物は、他の木工技術と較べ、日本での普及は意外に遅かったようだ。平安時代に結物技術が大陸から九州へ伝わったのが、日本の結物の始まりと考えられているが、その技術は、暫く

それ以上伝播しなかった¹⁴。それが鎌倉・室町時代になると、次第に結物容器が増え、多くの場面で曲物容器と置き換わり、江戸時代には庶民生活の隅々へと浸透した。

木器同士を比べたとき、結物の利点の一つは、材料の廃棄率の低さだろう。刳物や挽物の場合、素材の自身をえぐって容器を作るので、深さがあるものだと素材の大部分を捨てている。それに対し結物は、割りやすい木（スギ、ヒノキ、サワラなど）を割って細長板を作り、それらを並べて容器にするので、刳物・挽物のような無駄はない。その点、曲物も、木を割った薄板を曲げて作るので、材料の廃棄率は低いが、曲物は薄い分、華奢となり、大きなものは作れない。また曲物容器の深さは材料の薄板の幅に制限される点でも、曲物では大きなものは作れない。大きさに限度があることは、刳物・挽物にも当てはまる。刳物・挽物の場合、完成品が素材より大きくなることはないからだ。これらを考えたとき、結物のもう一つの利点は、素材より大きなものを作れる点だ。つまり結物だと、細長い側板を並べ足すことで、刳物・挽物、曲物とは比較にならない程いろいろな大きさの容器ができるのである。底板も、板を継ぎ合わせることで、必要な大きさが作れるわけである。

結物の側板の結束には、箍が必要である。箍材に適しているのは竹——とりわけ真竹^{マダケ}——である。引っ張りに対する強度が非常に強い点¹⁵が、竹を優れた結束材にしている。また成長が早く、豊富に採取できる点もよい。竹を長く裂いたものを、輪に編んだものが箍になる。緩

まない箍を編むには、胴を二周半から三周させる長さが必要という。直径二メートルの桶だと最低一五メートルほどの竹が要るが、真竹は好条件では二十メートルに成長するので、必要な長さがとれる。そしてその大桶に入れた液体の水圧にも竹は耐え、結束を保てるのである。桶樽が大量に、また巨大なものまでもが作れるようになったのは、竹に負うところも大きい。

というわけで木と竹を素材とする結物技術によって、軽くて丈夫で大小様々の容器を、無駄も少なく作れるようになった。桶がもつ性質は、壺や甕といった焼物容器（それらは重くて割れやすく、大きさも限度がある）と比べても利点が大きかった。ただし結物は、経年の木の縮みによって箍が緩むと、漏れが生じる。それゆえ保守が要るが、定期的に保守をすれば長く使えた。さらにどこかに傷みが出ても、傷んだ側板を交換すれば、再生できる。大桶などは実際そのような保守・補修を繰り返し、百年以上も大切に使ったという。木の文化には乱伐という負の歴史もあるが、他方で、桶樽に適した木を循環供給する林業も整えられた。桶樽用の杉を、人間の数世代をかけて育てる仕組みを作った吉野は、特に有名である。

四・三 桶を作る人・作る道具

桶を作るのは、「桶職」「桶大工」「桶屋」などと呼ばれた桶職人である。桶類が近世に庶民生活の必需品となつてから比較的最近まで、桶屋は大工、左官屋、畳屋などに並ぶ、身近な存在だった（例えば京

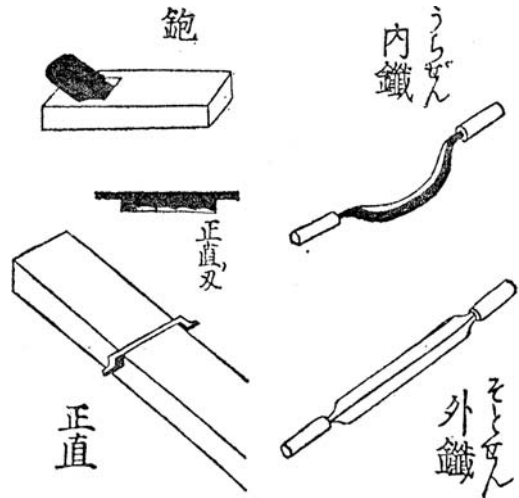


図2 銚と正直台
『和漢三才図会』より

都の町だと、桶屋は現在数軒しかないが、戦前、その数は一八〇軒もあつたという。桶屋は、注文に応じ一所でいろいろな桶樽を作つたようだ。だがその在り方は一通りでなく、たとえば灘をはじめとする関西の酒造地帯では、生活道具を作る桶屋とは完全に分化する形で、清酒運搬用の酒樽¹⁶を専門に作る職人たちがいた。また桶は保守を要するため、各地に修理専門の職人もいた。

桶職人は、他の職人同様、自分の身体と諸道具を駆使して仕事をす。伝統的な桶の作り方は、以下のように説明できるだろう。乾燥させ、ある程度の大きさに整えた木の塊を、カーブがついた刃物で割つて側板を粗取りし、それらをさらに天日乾燥させる。次に、両側に持

ち手がある「銚」という刃物を使う。準備した側板を、前方に設置した台と自分の腹の間に挟んで固定し、銚を両手で引くことで側板の表・横・裏を粗く削る。さらに外丸銚・内丸銚で側板の裏表を整える。桶の上部に来る木口も銚で削っておく。そして最も重要とされるのが、側板同士が正確に接合するように、専用の型で角度を決めながら、「正直銚（正直台）」という銚で、接合面を平滑にする工程だ。これを疎かにすると、隙間が残り、漏れる桶になってしまう。この「正直がけ」の作業が終わると、側板を並べ、仮組みをする。問題がなければ、次に側板同士を竹の合釘・米糊で接着し、仮箍で締める。糊が乾いたら、桶の胴の上木口を平らにし、底部も余分な部分を切り揃え、たうえで平らにし、さらに胴の内側を仕上げる。底板が入る溝を彫つたら、仮箍を外し、胴の外側も仕上げる。また竹を割り、必要な細さに裂き、薄く削り、それを編んで竹箍を作り、胴に打ち込む。底板を作るには、板を数枚、竹合釘と糊で接着し、円形に切り、面と縁を整える。最後に底板を桶に嵌め、桶が完成する。

粗描したこれら一連の作業を、桶職人は手際よく行う。銚をかけるときの両腕の往復運動、桶の胴を足で回転させながら銚掛けをする作業、長い竹を送り出しながら割り、裂く作業、竹を生き物のようにならせながら箍に編んでいく手の動き、槌を打ちおろして箍を締める動作、などなど、修業時代から観察・経験を重ね、身体で思考して覚えた種々の動きがそこにある。

*

桶の普及、桶職人の活躍は、道具の発展とも切り離せない。日本の木材加工の歴史の中で、①縦挽鋸と②台鉋の登場は画期的だったと言われる。木材用の鋸には横挽鋸と縦挽鋸があり、前者は繊維を切断しながら木を横に切る道具、後者は繊維に沿って木を縦に切る道具であり、二つは刃の形状が違う。横挽鋸は鎌倉時代にはすでに使われていたが、縦挽鋸はそれに遅れて室町時代中頃に、また台鉋は同時代にやや遅れて日本へ入ったと推測されている。鋸とはそもそも薄く叩き伸ばした鋼板に細かい刃を付けた道具で、製作には技術が必要である。そのため日本では丸太の製材は長らく、鋸に頼らない単純な方法で行われてきた。つまりそれは斧で倒した木に楔を打ち、繊維に沿って割ることで角材や板を作る方法である。割った面の粗い凹凸は、鉋や鉋で削ることで平らに近付けたのである。縦挽鋸と台鉋の登場は画期的だったと述べたが、縦挽鋸が画期的だったのは、割る方法以外の製材を可能にしたからである。また台鉋が画期的だったのは、それまで割った面の凹凸を鉋や槍鉋で均していたのが、縦挽鋸で挽いた材に台鉋を滑らせることで、従来とは較べものにならない平面を作れるようになったからである。

これらの道具は、桶作りとどんな関係にあるのだろう。桶作りで重要なのは、液体を漏らさぬよう、側板同士を密着させねばならない点だ。台付き鉋の登場以前は、側板の接合面も槍鉋——あるいはそれに類した刃物——で平らにするほかに、熟練を要しただろう。だが新しく登場した正直鉋は、平面製作の困難を簡単に解決した。正直鉋は

台鉋の一種で、水平で長い台を持ち、その中央に刃が入れてあり、刃を上に向け、台を固定して使う。台の上に側板を押し滑らせると、面が平滑に削られる。この正直台の登場で、桶作りが格段に容易になり、桶の普及が本格化したのである。もう一つ、縦挽鋸と桶の関係についてだが、桶作りでは、基本的に木を割って材を取るため、ふつう縦挽鋸は使わない。しかし割り易い樹種でも、まっすぐ木理が通った素性のよいものばかりではない。曲がり・振じれがある木もあるが、曲がった木は繊維に沿って曲がって割れるため、桶材には使いがたい。しかし縦挽鋸があれば、木理がどんな材もまっすぐに製材できる。近世には醸造用の大桶が多く作られたが、それが可能になったのは、縦挽鋸によって、木理によらずに大きな部材が得られるようになったからと言われる。

桶職人とその道具から桶を見てきたが、桶作りは桶職人だけでは成り立たないことにも、留意すべきだろう。例えば桶屋は様々な刃物を使うが、それらを作るのは、鍛冶職人という別の職人である。また桶の素材となる木は、山仕事に関わる職人たち（木の苗を植え、枝打ちをし、木を切り、運び出したりする技術を持つ様々な人々）が生産する。竹の生産に関わる人々もいる。輸送用の酒樽の場合、規格化されたサイズの側板——「樽丸」と呼ばれる——を専門に作る職人がいて、樽職人は受け取った樽丸から酒樽を組み立てる。桶作りを追ってゆくと、桶屋を支える他の多くの人々の存在も視野に入ってくる。

四・四 桶の用途

桶の普及は、日本人の生活に数々の変化をもたらした。顕著なものに、醸造文化全体への影響がある。桶は酒造りを変えた。中世の酒造りは、陶製の壺・甕を利用した小規模なもので、醸造用の甕は二〜三石入りが限度であった。しかし近世初頭には一〇石入りの醸造用木桶が作られるようになり、一度に仕込める酒量が飛躍的に増えた。酒造りは木桶で行うものへと変化するとともに、桶の大型化は進み、二〇石、三〇石入りも作られるようになった。仕込み、貯蔵用の大桶だけでなく、酒造容器のほとんどが桶樽となり、酒蔵には様々な大きさ・形の桶樽が溢れた。酒造地帯が——伊丹や池田、後には灘五郷といった——上方筋に集中したのは、吉野という杉産地があったこと、良質な竹も近辺に豊富だったこと、とも大いに関係がある。そして大量に作られた酒は、新しい四斗樽に詰められ、廻船で江戸へ下り、そこで消費された。その量は最盛期は百万樽を超えたといひ、毎年それだけの新樽が作られたのだ。

桶樽がもたらした影響は、酒造りに止まらない。酒造の副産物である大量の酒粕から、安価な酢が作られ、この粕酢は江戸で寿司を庶民の日常食にさせた。また酒造用（仕込み、貯蔵）の大桶は修理をしながら五十年も使うと、味噌や醤油の醸造所に払い下げられ、そこでも修理をしながら、今度は味噌・醤油製造のために百年ほど使われた。加えて江戸で空になった酒樽は、醤油等の運搬に再利用された。このように桶樽は、酒だけでなく各種醸造調味料の普及にも大いに関わっ

ており、それらなくして日本の醸造文化は語ることはできない。

桶類は他に、漁業、製塩業、農業などでも活躍した。農業とのかかりでは、日陰の桶として、「肥桶」^{こえおけ}を挙げてよいだろう。江戸時代には人口増加に伴い、下肥が積極的に農業で使用されるようになった。原料となる排泄物は、人口が集まる都市部で回収され、大量の糞尿が貴重な資源として、舟や牛馬で近郊の農村まで運ばれた。その回収・運搬に使われた容器が、丈夫で軽く数を調達できる肥桶だった。下肥は田畑の穀物・野菜の収穫を大幅に増やし、それら収穫は都市に届けられ、人々の口へ入った。収穫の一部は酒や味噌や醤油になって消費された。そして都市の排泄物は再び農村へ循環した。このような屎尿利用は、下水のない時代に都市の衛生を保つことにも貢献した。この生活全体を、根底で支えたのが桶であった。

桶類は生業だけでなく、家の暮らしの随所にも溶け込んだ。明治生まれの女性が、家庭にあった桶の種類を次のように回想しているが（吉羽 一九八七、九頁）、それらは明治以前からあり、大正、昭和のある時期まで普通に用いられていたものだ。

- ① つるべ桶（井戸から水を汲み上げる）、② 手桶（つるべ桶から水を移して運ぶ）、③ 洗面桶（顔を洗う）、④ 研ぎ桶（米を研ぐ）、⑤ 洗い桶（野菜などを洗う）、⑥ お櫃（ご飯を入れる）、⑦ 半切桶（浅い桶で、うどん、そば、まんじゅうの粉を練る。すし飯を合わせるのにも使う）、⑧ 番手桶（掃除のような雑役に使う手桶）、

⑨風呂桶、片手桶、湯桶（風呂関連の道具）、⑩岡持（蓋と手のついた浅い桶で、料理を入れて運ぶ）、⑪雨水桶（雨水を溜める）、⑫蒸桶（赤飯などを作るときに使う）、⑬洗濯盥（洗濯に使う）、⑭漬物桶、味噌桶、醤油桶（漬物、味噌、醤油を作るのに使う¹⁹）。

樽桶類が溢れる生活は、明治期以降徐々に衰え、それらは今日ほとんど残っていない。上水道の整備で、人は川や井戸から水を汲まなくなった。下水道が発達すると、尿尿の回収はなくなり、農家は化学肥料を使い始めた。またトタンやプラスチックなど、安価な新素材の容器が広まった。酒造りはホーロー、ステンレスのタンクになり、出荷はガラス瓶になった。ご飯は電気炊飯器で保温も兼ねるようになり、櫃は使わなくなった。これらの変化が桶類を不要にした。

しかし現在、桶樽文化が生活から完全に消滅したわけではない。電気炊飯器の時代でも、水分を調整し、冷えてもご飯をおいしく保つお櫃には一定の需要がある。半切り桶も、寿司飯を作るのに必要だろう。風呂場で、片手桶、湯桶を使う人もいる。味噌桶で自家製味噌を仕込む人もいる。手桶で打ち水する夏の日の光景も、私の町ではたまにみかける。スギやサワラなどの柾目の桶には、楚々として飾り気のない材料の魅力が、そのまま現れている。

五 ポリバケツ民具論再考

桶樽のあらましを長く見たのは、「手桶とは何か」を知りたいためだった。桶はふだん顧みる機会もないだろう裏方道具である。それをあえて振り返ることで、それは実は語るべき多くの顔をもった道具であることが見えたように思う。しかし桶であれ何であれ、何かを知る・理解する、とはそもそもどういうことか。何かを知るには、何を知ればいいのかだろう。アリストテレスは、何かを理解することについて、次のように言う。

「……」われわれがそれぞれのものを知りえたとおもうのは、それを成り立たしめている第一の原因・第一の原理を知って、その構成要素にまで到達したときにほかならない「……」。(アリストテレス 一九八〇a、五一頁)

「……」われわれは、それぞれのものについて〈なぜ〉ということとを把握しないうちは、つまり第一の原因を把握しないうちは、それぞれのものを知りえたとはおもわない。(アリストテレス 一九八〇a、六九頁)

アリストテレスは、それを知ること対象が分かるといふ、対象の

「第一の原因」なるものを、多元的に考えている。ここで「原因(原因)」という語が意味するのは、「なぜ或るものがそこに在るのか」を説明する事由——対象をあらしめている「ことわけ」——であるが、彼によればそれには四つある。それらは次のものである。

- ① Xがどういふものか、どういふ形のものかを表す規範観念。
- ② Xの材料となるべき素材。
- ③ Xの観念を基に、素材から実際にXを作り出す作用。
- ④ Xが満たす目的。

伝統的に、①は形相因、②は質料因、③は動力因、④は目的因と呼ばれる。因みにポリバケツ民具論の考えは、民具には特有の「アイデアとパターン」があり、それが木やプラスチックといった素材の中に生かされることで、例えば手桶やポリバケツができるというものだった。すると手桶やポリバケツに流れている「アイデアとパターン」はその形相因に、木やプラスチックは質料因に対応するのだろう。さらに手桶やポリバケツの制作に関わる人や機械・道具、技術などは動力因で、「日常の生活のため」という様々な用途は、目的因ということになる。アリストテレスの考えでは、対象の理解は、こういった複数——彼の場合は四つ——の構成契機を理解することで得られるものであり、一般に納得しやすい考えだろう。我々もそれを念頭に、桶の発想、桶の素材、桶の製作、桶の用途の四つに整理しつつ、樽桶のあ

らましを示した。岩井本人も、彼の曲物研究では、素材、製法、作り手にも言及した総合的アプローチを行っている(岩井 一九九四)。

ポリバケツ民具論の問題は何か。振り返っておくなら、岩井の民具観の基本にあるのは、民具の古典的定義——すなわち民具とは「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」といふ考え——である。加えて彼は、古典的定義には必ずしも明示的でない、民具が備えるべき伝承性があることも強調した。つまり民具は、生活の必要から作られた道具が「慣行的に伝承される」ものだ。ただ彼は、民具の伝承性をその「アイデアとパターン」にのみ求め、素材や製法の伝承性は切り捨てるのであった。——これについて、二つの問題を指摘したい。

【「アイデアとパターン」——形相因——の貧弱さ】

一つ目の問題は、民具の伝承性を「アイデアとパターン」に絞るとき、岩井はそもそも道具から「アイデアとパターン」を必要十分に取り出せているか、というものだ。例えば他の容器と比較したときの手桶の最大の独自性は、それが——木板を束ねて作る——結物であることに見出だせると思われるが、手桶とポリバケツに共通して流れる伝承性を考えるとき、岩井がその「結物性」のアイデアに言及することはない。それは彼のアプローチの必然的帰結だろう。もしポリバケツと桶を何らかの連続した「アイデアとパターン」の下に、一つに繋げようとすれば、ポリバケツは型に流し込んで作る成型品なのだから、

桶の結物性は考慮から落とさざるをえない。

では両方の道具に、「一貫して流れているアイデアとパターン」とは何だろう。二つの共通点と言えば高々、「ものを入れる凹み^{くぼ}があり、持ち運びの持ち手が付いている、云々」くらいに思える。しかしここで問いたくなるのは、「凹み、取っ手、等々」は、果たして伝承された「アイデアとパターン」なのかということだ。というのも、機能から自ずと生まれる形がある。生物の例だと、昆虫と鳥の羽は身体の左右に伸びた薄く広い構造体で形が互いに似ているが、それらは飛ぶ機能のために自ずとその形になった。しかし両者に発生的つながり——遺传的伝承——はなく、それらは別々の経路を経て、似た形へ進化したものである。以上のことは「二つは相似だが相同でない」と表される。ここから手桶とポリバケツについて、次の懸念が生じる。つまり凹み・持ち手があること等々も、鳥と昆虫の羽と似て、求められる機能から自然と——伝承とは無関係に——生じたことに過ぎないのでないか。ポリバケツと手桶には特に伝承関係はないが、機能が類似しているため形も類似しており、時代状況の中で単に一方が他方を置き換えた、ということではないか。

この懸念が妥当なら、次のように言わねばならない。ポリバケツ民具論のようにプラスチック成型バケツを、手桶の「アイデアとパターン」を一貫して伝承する民具とみなすことは、手桶の独自性である結物性——それは道具史における、人間の真のアイデアの一例だろう——を等閑視し、ポリバケツと手桶の単なる相似的な類似性（凹み、

取っ手）を、伝承的「アイデアとパターン」だと読み違えることだろう。民具の伝承性を、そのような「アイデアやパターン」に（誤って）見出そうとすることは、形相関的な側面に限っても、民具を不充分に、表層的にしか捉えない結果を招くと思われる。

【その他の構成要素の切り捨てによる概念の希薄化】

ポリバケツ民具論に対して指摘できる第二の問題は、(1)手桶を構成する要素は複数から成り（四原因説では四つ）、そしてさらに(2)民具には伝承性が求められるなら、その伝承性は当然その構成要素のただ一つでなく、それら複数に跨って求めるべきだろう、というものだ。つまりポリバケツが手桶を伝承する道具なら、手桶の「アイデアやパターン」だけでなく、素材や製法や用途についても、手桶と何らかの伝承的なつながりを持つてしかるべきだ。しかし岩井は次のように言うのだった——

材質が何であるか、また手作りであるか否かは、資源材料、生産構造、流通機構、社会形態の差異からくることであって、民具にとつて本質的なものではないと、割り切つて理解する必要がある（岩井 二〇一一、六一頁、一九九頁）。

この引用箇所では、素材や製法（すなわち質料因や作用因）は民具にとつて本質的でない、と宣言している。プラスチック品や機械生産

品であっても、その工業的特性を理由に、民具から排除できない、ということである。

右の引用で、特に取り上げておきたい箇所がある。それは、素材や製法が民具に本質的でないのは、素材や製法の違いは「資源材料（の有無）、生産構造、流通機構、社会形態」——といった社会状況——の違いによって決まることだからだ、とされている部分だ。なぜ社会状況に左右されることは、民具の本質に関わらないというのだろうか。おそらく岩井は、社会状況（その進歩状況）はその時代や場所の偶然的な事情から決まるものすぎず、そういう偶然に左右される素材や製法は、その偶然性ゆえ、民具の本質から外すべきなのだ、と考えているのではないか。

しかしXという対象の構成要件としてA、B、Cがあるとして、とさきによってAの充足が難しい場合が増えてきたとき、「Aを満たせるか否かは状況によることだから、それはXの構成要素から除外すべきだ」とするならば、それこそが状況的で、アドホックな対応でないか。仮にそうしたとき、Aも構成要素と考える人からすれば、Xはその意味を変える。Xは本質を維持したのでなく、元のXでなくなるのである。

結局、岩井の考えは、民具の複数の構成要素の一つだけ（「アイデアとパターン」）に伝承性を求めること——しかも不十分な形で——によってだけでなく、他の構成要素を切り捨てることによって、民具の概念を貧困にさせる。物は（アリストテレス的に）複数の構成要

素から成ると考えるならば、素材が何か、製法がどんなであるかは、むしろ民具の本質・アイデンティティに直接関わることだろう。そしてそういった素材や製法は、資源や生活のありように大きく影響されるのだから、「資源材料、生産構造、流通機構、社会形態」までもが、民具の本質に触れてくる重要事項でなからうか。もちろん社会状況は、時代によって変化する。だが変化の中に、比較的、変わらずに伝承される部分があり、民具の伝承性は、そのように、意志や努力によって継承された諸々のつながりの、ゲシュタルトの全体の中にこそ、見出しうる。文化はそうように入組んだ、立体的なつながりをもつものだろう。そして民具の構成要素の複合性を重視すれば、素材や製法はもちろん、「資源材料、生産構造、流通機構、社会形態」さえ、割り切つて捨てることはできないはずである。

六 おわりに

本稿はポリバケツ民具論の是非を検討するもので、「民具とは何か」自体を問うものでなかったが、終わりに差しかかり、この問いに関して考えておくべきことがあるように思う。民具学ではかつて、民具の厳密な定義を求められたことがあった⁽²¹⁾。だが厳密さはどこまで求めるべきものだろうか。

一般的に、ものの分類あるいは概念の定義の仕方についての現代的考えは、必要十分条件的厳密さが常に好ましいとは考えない⁽²²⁾。そこ

で曖昧さが許容されることになるが、曖昧さを内包する概念でも、実際の使用に支障がないものは少なくない。それどころか曖昧だからこそ、柔軟に永く使える耐久性がある概念にもなりうる。民具概念は、そのような曖昧さを含む概念の一つと認識すべきでないか。

基本的には、民具概念はその典型的事例を先人の生活に持つものであり、さらにそれらの典型諸例は、「身近な自然素材から手仕事で作られ、日常生活で使われた道具」として特徴付けうるものだろう。⁽²³⁾ 時代は変化するもので、とりわけ二〇世紀以降の変化は著しいため、過去の典型例と同じものを作ることは年々難しい。典型例に近いものでも、製作工程が部分が機械化され、素材を輸入に頼っていることなどは稀でない。その現実を認めただ上で、民具とは、典型例を規範——理念型——としつつ、規範から外れるものも、その程度によつては仲間に含みうる緩やかな集合である、と考えるのが妥当でないか。ただし中心から外れるほど、限界事例に近づき、やがては概念から脱落するものとなる。

そう考えるなら、或る生活道具が民具か否かは、典型例とのつながり、また典型例からの相対的距離で判断されることになる。例えばポリバケツは、比較対象となる典型的民具としての手桶のつながりから、最も遠い場所にある。というのもポリバケツは、「アイデアとパターン」については、最小限の類似しか手桶と共有しない。加えて、素材的には、結物と——そして「木の文化」に属する他の伝統的な木製容器とも——断絶がある。製法は機械によるものだから、職人の手

仕事の伝統とも断絶がある。実際、プラスチック容器の普及に押されるようにして、桶職人の多くが昭和三〇年代に廃業・転業を余儀なくされたという。ポリバケツは手桶を受け継いだというより、(托卵されたカッターの雛のように)それとすり替わったのである。だからポリバケツは、手桶の系譜の伝承者でなく、むしろ伝承との断絶・葛藤を象徴する道具と見るべきでないか。民具概念を柔軟なカテゴリーと考えたときでさえ、ポリバケツは、民具の規範的事例とのつながりは最大限に薄い道具である。

伝承者か否かの判断が、ポリバケツより難しい場合もある。たとえ(木が割れる性質を生かした伝統的な)打割法でなく、機械製材した板で作った桶には、どれほど伝承性があるのか。側板を接着するのに、米糊でなく木工ボンドを使ったものかどうか。側板同士をつなぐ合釘を省略したものはどうか。内外の削りや箍の打ち込みを機械で行うものかどうか。竹箍を、針金・金属テープにしたものはどうか。側板を結び合わせるのに箍を使わず、合成接着剤の強力な接着力だけに頼ったものかどうか。——これらの物と、規範例との距離をどう見積もるか。あるいはどれくらい逸脱なら、総合的にみて、手桶の系統樹の枝に組み込めるものと見なすか。典型例との違いを、その道具の進歩と見なせる場合もあるのか。これらの問いに対し、一律に結論は出せない。人によって判断は異なりうるし、状況によって判断が異なることもありうるため、個別に検討・反省が必要だ。だが少なくとも、これらの様々な、結物の微妙な逸脱例、境界例も考慮すると、ポ

リバケツは連続性において、それらの逸脱のはるか彼岸にある道具だ。ポリバケツが手桶の伝承者でないことは、明らかでないだろうか。

注

- (1) 太字追加。続く引用の太字二ヶ所も同様。
- (2) 「ポリバケツ」は企業の登録商標であるが、本稿では普通名詞として使う。
- (3) 同趣旨の主張は小谷(一九八二)にもあり、岩井に影響を与えている。
- (4) 詳しく取り上げないが、民芸分野にも類似の主張がある。それは美しい実用品であれば、工業製品も民芸品である、という主張である(湯浅一九七九、一九八〇)。
- (5) それらは当時「土俗品」とも呼ばれていた。ただ表現に伴う侮蔑的ニュアンスのため、洪沢たちはこの語を避けた。
- (6) 洪沢敬三も宮本常一も、昭和三〇年頃の時点で、陶器を民具と見なしでいなかったらしい(宮本「一九七九」一九八七、四七頁)。
- (7) 彼は、この要件は論文「民具試論(一)」(宮本一九六九)で表した定義をもう一度整理したものと言うが、二つの間では書き方が変わっているところもある。
- (8) 「民俗資料」の言葉はかつて文化財保護法でも使われたが、一九七〇年の法改正で言葉遣いが変わり、「民俗資料」は「民俗文化財」となった。「有形民俗資料」はしたがって「有形民俗文化財」となった。
- (9) 宮本は、「それ[ら]」を専門に研究する人びとの手によって研究法も確立されてきている[ことを]、石造物や民家を民具から外す理由としているかにみえるが、それだとセクシヨナリズムになりかねない。既存の研究を適宜踏まえつつ、石造物や民家も、鍋や釜の延長として民具学でも扱うことは、期待すべきことのように思われる。

(10) 例えば竹細工の籠、藁細工の草履などは一次加工の品である。また庶民が日常使用した白木の椀は一次加工の品である。しかし白木地の椀に、さらに別の素材である漆をかけて作った塗物椀は、二次加工の品である(宮本一九六九、五頁)。

(11) 「一般に複合加工されたものは一応民具と区別せられる[美術工芸品のよう]なもの」が多くなる。染色のようなのはいずれも複合加工である。するとこれは民具に入らぬかというに、縞や緋のようなのは、農家の婦女によって織られるものが多く、「美術品を作るよう」専門の職人ではないということによって民具に入ることになる[……](宮本一九六九、五頁、「」内の語句は筆者による補足)。

(12) この方針には疑問も浮かぶ。機械織りの反物は、機械仕上げなので、民具でないことになろう。しかし反物をさらに手仕事によって、着物にすると、それはその手仕事によって、民具に変わるのだろうか。

(13) 大桶にはさらに巨大な六〇石入り、百石入りのものもあるという。

(14) 結物技術で作った筒を井戸側に利用した跡が、九州地方の平安遺跡から発掘されているが、そこから先の展開がないという(小泉編二〇一四、鈴木論文二三頁以下)。

(15) 因みに「おけ」はもともと續んだ麻糸(麻)を入れる容器(筥)を指す言葉で、古くは曲物が使われていた。しかし結物の普及に従い、専ら結物の容器が「おけ」と呼ばれるようになった。

(16) 酒樽は、規格化されたものを早く大量に作ることに肝要で、そのため素材・製法には普通の桶類と異なる特徴がある。

(17) 銚を考えることができるだろう。吉川(一九八三、二六六―二七七頁)は、槍砲の先端にも柄をつければ銚になると指摘し、銚は槍砲から分岐したものだと言う。そして銚は槍砲より「平滑に優れた機能」をもつ道具である。

(18) 吉川(一九八三、二七八頁)は、正直砲が台砲の始まりである可能性を指摘している。

(19) 吉羽(一九八七)にあるリストを少し改変した。改変したのは、括弧

内の説明を補足・修正した点および、⑭が「樽」とあったのを「桶」とした点などである。

(20) 他に漏れない、サイズや重さが手頃である、適度に丈夫である、などを加えてもいい(本稿の三・二「最後段落を参照」)。

(21) それが宮本の民具定義の試みとなり、それに対する一つの応答としてポリバケツ民具論が登場したわけである。

(22) 例えばヴィトゲンシュタインの家族的類似の考えは、この種の傾向の先駆けだろう。そして彼が挙げるゲームの概念は、厳密な定義を寄せ付けない概念の好例である。

(23) 宮本の民具規定だと、①②③④あたりの項目が基本になる。

参考・引用文献

- アチックミュージ엄編(一九三六)『民具蒐集調査要目』アチックミュージ엄。
 アリストテレス(一九八〇a)『自然学』藤沢令夫訳、田村松平編『ギリシャの科学』(世界の名著9) 中央公論社、五一―一二二頁。
 アリストテレス(一九八〇b)『形而上学 第一卷』藤沢令夫訳、田村松平編『ギリシャの科学』(世界の名著9) 中央公論社、一二三―一五二頁。
 石村真一(一九九七)『桶・樽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(ものと人間の文化史82)、法政大学出版局。
 岩井宏實(一九九四)『曲物』(ものと人間の文化史75) 法政大学出版局。
 岩井宏實(二〇〇一)『民具学の基礎』慶友社。
 遠藤元男(一九七五)『細長板と割竹の造形者・結桶師』『歴史手帳』三巻二号、六一―九頁。
 木内武男・黒田乾吉・前田泰次・河北倫明・松村貞次郎(一九七八)『木工』(カラー日本の工芸4) 淡交社。
 木内武男(一九九六)『木工の観賞基礎知識』至文堂。
 小泉和子(一九八三)『桶・樽』、永原慶二・山口啓二他編『建築』(講座 日

本技術の社会史 第7巻) 日本評論社、三二八―三三三頁。

小泉和子編(二〇一四)『桶と樽——脇役の歴史』法政大学出版局。

国立民族学博物館監修(二〇一三)『屋根裏部屋の博物館——渋沢敬三没後五〇年』淡交社。

小谷方明(一九八二)『大阪の民具・民俗志』文化出版局。

近藤雅樹(二〇〇二)『民具の定義とイメージ』赤田光男・香月洋一郎・小松和アジオ編『民具と民俗』(講座日本の民俗学9) 雄山閣、一五―三二頁。

須藤護(二〇一〇a)『吉野の木霊』田村善次郎・宮本千晴監修『宮本常一と歩いた昭和の日本8——近畿②』(あるくみる 大きく双書 農山漁村文化協会、八九―一二二頁)。

須藤護(二〇一〇b)『灘五郷の桶と樽』田村善次郎・宮本千晴監修『宮本常一と歩いた昭和の日本8——近畿②』(あるくみる 大きく双書) 農山漁村文化協会、一七八―二一六頁。

竹中大工道具館(二〇一六)『常設展示図録』竹中大工道具館、第二版(初版二〇一四)。

寺島良安(一九八六)『和漢三才図会5』島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注、東洋文庫。

遠山富太郎(一九七六)『杉のきた道』中公新書。

農商務省山林局編(一九八二)『木材ノ工藝的利用』(復刻版) 林業科学技術振興所(初版一九二二、大日本山林会発行)。

松村貞次郎(一九七三)『大工道具の歴史』岩波新書。

宮本常一(一九七六)『民具論』、日本生活学会編『民具と生活——生活学論集Ⅰ』ドメス出版、九―一五三頁。

宮本常一(一九八七)『民具学の提唱』(宮本常一集33) 末来社(初版一九七九)、『民具学の提唱』(民俗文化双書1) 末来社。

宮本常一(一九六九)『民具試論(二)』日本常民文化研究所編『民具論集Ⅰ』(常民文化叢書2) 慶友社、一―二四頁。

村山麗子(一九七六)『桶のある生活』、日本生活学会編『民具と生活——生

- 活学論集I』ドメス出版、一〇七一—一四八頁。
- 柳宗理(一九七九)「新幹線民藝品試論」についてのコメント」『民藝』三二七号、日本民藝協会、二〇—二四頁。
- 湯浅八郎(一九七九)「新幹線民藝品試論」『民藝』三二七号、日本民藝協会、一八—一九頁。
- 湯浅八郎(一九八〇)『私の民芸道観』国際基督教大学くらし手の会。
- 柚木学(一九八三)「酒造」、永原慶二・山口啓二他編『農業・農産加工』(講座 日本技術の社会史 第1巻) 日本評論社、一三九—一六七頁。
- 吉川金次(一九八三)「大工道具」、永原慶二・山口啓二他編『建築』(講座 日本技術の社会史 第7巻) 日本評論社、二六九—二八四頁。
- 吉羽和夫(一九八七)『木で液体を包む——桶と樽の博物館』元就出版社。
- Witgenstein, Ludwig (1958) *Philosophical Investigations (Philosophische Untersuchungen)*, Blackwell.

Summary

Are Plastic Buckets Folk Tools? ——A Philosophy of Things Made——

Ken MARUTA

In this article, I will take up a certain theory of folklore studies which asserts that a plastic bucket should be considered a folk tool of the present age. Why was such a claim advanced, and what exactly is wrong with it, if it is in fact problematic? First, we will see the formation of the classical definition of folk tools (Chapter 2). Then, we will see how the “folk tool theory of plastic buckets” was put forward as an antithesis to the classical definition (Chapter 3). In order to recognize the plurality of conditions for folk tools, we will have an historical overview of wooden *yuimono* buckets (Chapter 4). The “folk tool theory of plastic buckets” is criticized for satisfying only one condition (insufficiently at that), and neglecting the others (Chapter 5). Finally, the suggestion is made to determine membership as a folk tool according to the relative distance from core examples.

[Key words] folk tool theory of plastic buckets, wooden bucket, “ideas and patterns”, Aristotelian plurality of causes, traditionality